

三高教室 No.123
1984年7月20日

女性の嫉妬心はか弱き男性の味方か

唐 沢 孝 一

アフリカに旅したときのこと。「結婚していますか」と聞かれたので、正直に「はい」と答えた。「奥さん何人いますか」「え？ なんですって」、「奥さんは何人いますか」「一人ですけど……」「え、本当ですか、日本から来た金持が奥さん一人だなんて」私が金持であるか否か(そのように見えたか)は別として、どうも釈然としない。

日本や欧米では一夫一妻が当たり前なのに、アフリカや中近東、インドなどでは一夫多妻がごく一般的であるという。多数の妻を持つことによって社会的・経済的地位の高さを誇示しているともいう。エジプトでは、一夫多妻の結果(しかも、男性が女性の両親に大金を支払わねばならないため)、独身男性が増加し社会問題になっているという新聞記事を読んだことがある。人類全体をみると約80%が一夫多妻制社会で生活しているといわれ(但し、一夫多妻制社会でも一人の妻と結婚している者もいるし、独身者もある)、霊長目でもニホンザルのボスが雌ザルを独占するように一夫多妻制は82%(200種中163種)を示し、なんと哺乳類全体では96%に及んでいる。こうなると一夫一妻制こそ少数派であり、どうも釈然としないのはむしろアフリカの人だったかも知れない。

一体、人も含めた動物の配偶関係はどのように形成され、どんな意味があるのだろうか。ここでは哺乳類の場合は別の機会に譲るとして、90%以上が一夫一妻制を採用している鳥類を例にこの問題を考えてみよう。

百舌鳥の嫁入り

哺乳類では、出産はもちろん、授乳も雌が分担するため育児は雌中心になる傾向が強い。これに対し、鳥類では産卵を除くと抱卵や育雛をどうしても雌がやる必要はない。むしろ、雌雄で協力して繁殖活動を行った方が

卵を冷やさずにすみ、多数の雛を育てられるにちがいない。こうした理由から、鳥類の大部分は一夫一妻制である。

私がここ10年近く研究しているモズも、一夫一妻の典型例である。モズは日本各地の田畑や公園などに広く分布している人里の鳥で、秋に単独なわばりを形成し冬を越す。秋のなわばりをめぐる争いは熾烈を極め、老若男女を問わずキー、キー、ギチギチギチとかん高い声を発して、いわゆるモズの高鳴きが聞かれる。時には空中戦がもつれて地上に落下、なおも激しくつつき合うこともある。ところが、春2～3月になると、いつまでもなわばりを守っているのは雄だけで、雌はなわばりを離れて移動するようになる。

雄の占有するなわばりに、他の地域から飛来したモズの雌が入ってくると、秋の頃ヒステリックに鳴いていたモズからは想像もつかない浮いたようなまろやかな声で、つぶやくように上づつた調子で歌い出す。ウグイスやヒバリ、コヨシキリやオオルリなどの美しく囀る小鳥たちの歌を上手に真似ることもある（いろんな鳥の擬声ができることからモズを百舌鳥と書く）。しかも、雌に向って顔を左右に激しく振りながら情熱的に求愛するのである。もし雌が雄を気に入ればつがい形成されるが、気に入らなければ別のなわばりの中へと飛んで行ってしまう。雌に振られた雄は、未練がましくいつまでも追いかけたりせず（死ぬほど想いつめたりせず）、次にやってくるであろう別の雌を待つ。独身雄は、自分のなわばりに入ってくる雌に対してはひと通りプロポーズし、つがい形成されるかどうかは雌によって決定される。では雄の選択権をもつ雌は、何を基準に雄を選ぶのであろうか。雄自身（姿や歌、情熱的な求愛）に惚れこむのか、それとも雄の所有するなわばり（営巣場所や食物＝財産）に目がくらむのだろうか。多分両方であらう。いづれにせよ、雌が雄のなわばりに入っていくという“嫁入り婚”なのである。

秋のなわばり争いは、雄にとっては嫁さんに少しでも気に入ってもらうために必死でマイホームの土地を獲得するための闘争でもある。大学入試でいえば、共通一次（秋のなわばり確保）で足切りをまねがれた者だけが早春の二次試験（雌へのプロポーズ）に臨めることになる。

結婚の条件

嫁さんを迎え入れ、つがいが形成されると、雄の態度にも変化がみられるようになる。他の雌がなわばり内に入ってきて、独身時代のように次々とプロポーズしたりしない。それどころか雌をなわばりの外に追い出すこともある（妻以外の女性を避ける傾向がみられる）。独身の雌もまた、すでにつがいを形成している雄（妻子ある男性）を避ける傾向が出てくる。独身時代は女性にもてても、結婚するとそれだけの理由で急にもてなくなることによって、独身の雌雄がつがいを形成するのを促進しているともいえる。しかも、まれにつがいのなわばりに入ってくる雌に雄が言い寄ろうとしても、侵入した雌はつがいの雌によって攻撃され追い出されてしまう。また、つがいの雌は雄（夫）にガードされているため、他の雄が接近しても、たちまち雄同志の闘いに発展してしまう。いづれにしても、雄対雄、雌対雌といった同性の反発（嫉妬心）によって一夫一妻制は促進され、維持されていると言えそうである。

つがい形成後も、雄は雌に対して親密さを保つために涙ぐましい努力が続けられる。トカゲやカエルを捕えては、食べやすく引き裂き、肉片を雌にプレゼントして気をひくのである。このため、独身時代に比較し雌の体重は急に増加し、時には1.4倍にも達することがある。このことが雌の産卵に有利に作用することはいうまでもない。

一夫一妻制を維持することにより、雌の方からみれば抱卵や育児に関して全面的に雄の協力を期待できるであろう。仮に、一夫二妻ならば、明らかに雄の協力は半に減少してしまう。雄にしてみれば、雌をガードすることによって、確かに自分の子を育てているという保証が得られるし、なわばり内に複数の雌が繁殖したのでは雄の育児負担が増し、十分に子が育たないという判断も働くにちがいない。雌雄ともに、“自分の遺伝子を継承する子を最大に残そう”という共通の目標を見い出せることになる。一夫一妻制は、このように、いわば雌と雄の双方による妥協の産物だと解釈されている。

一夫多妻制を採用した鳥

一夫一妻制を維持する前提条件が崩れたらどうなるであろうか。雌が雄のなわばりに入ってくる際、たとえ妻子のいる雄であっても繁殖に有利と判断したらどうなるだろう。夫の協力は半減しても、雄のなわばり（財産）に貧富の差が著しいならば、貧しい雄の第一夫人になるよりも、富める雄の第二、第三夫人になる方が「子孫を最大に残す」という繁殖戦略に適合することになる。

たとえば、江戸川河口付近のアシ原で繁殖するオオヨシキリでは一夫多妻制を採用している。夏鳥であるオオヨシキリの雄は、雌より先に渡来してなわばりを形成し雌の来るのを待ちうける。雌は、雄の囀っているなわばりに入りつがい形成する。巣造り、産卵は雌。雄はもっぱらなわばりの防衛にあたる。はじめの雌が抱卵に入ると、雄は第二の雌を求め、第二の雌が抱卵に入ると第三の雌というように、最高一夫五妻まで知られている。やがて最初の雌の雛がかえると雄も育児にあたり、巣立つころには第二の雌の雛を育てるというように、実に精力的で合理的繁殖を行うことができる。生息地のアシ原の質的不均一性が、雄のなわばり間の貧富差を生じたために、富める雄を複数の雌が選択したことになる。この場合、第一夫人は、第二、第三夫人に対してなぜ寛大でいられるのだろうか。第一夫人にとっては、夫の協力は明らかに減少するかに見える。しかし、オオヨシキリにしてもセツカにしても、一夫多妻制の鳥の雌は、同性に対する嫉妬心を捨てることにより、より有利な条件で繁殖できる方法を選択したにちがいない。

オオヨシキリやセツカでは、同一雄のなわばり内ではあっても雌同志の繁殖している場所は離れているし、繁殖の時期がズレていることが多い。これに対し、キジの場合は、雄同志の闘いに勝った1羽の雄が複数の雌と同じ群れをつくって繁殖し、ハーレムを形成する一夫多妻制の形態をとる。特定のスーパースターに雌が集中する反面、雌から見離された独身雄が増えてくるにちがいない。雌の同性に対する嫉妬心を捨て去る代りに、最も優れた遺伝子をもつ雄を選択したことになる。クジャクやキジの雄の美しさ（二次性徴）は、こうした雌の繁殖戦略のなせるわざである。

一夫一妻制にせよ、一夫多妻制にせよ、共通しているのは雄同志の闘いである。男の嫉妬心の強さについては、いまさらシェークスピアの台詞を引用する必要もないだろう。問題なのは雌の側の嫉妬心である。もし、一夫多妻制の鳥であっても、雌の同性への嫉妬心が高まれば、一夫多妻制は崩壊し一夫一妻制に逆戻りし、貧しくか弱き雄も結婚できる可能性が高まるであろう。どうやら一夫一妻制は、ダメ男にも平等に結婚のチャンスを与えられるよう進化してきたようだ。それもひとえに女性の嫉妬心に支えられてのことである。

動物の配偶関係をもっと知りたい人のために、本校図書室にある本の中から次の出版物を紹介して終りとしたい。

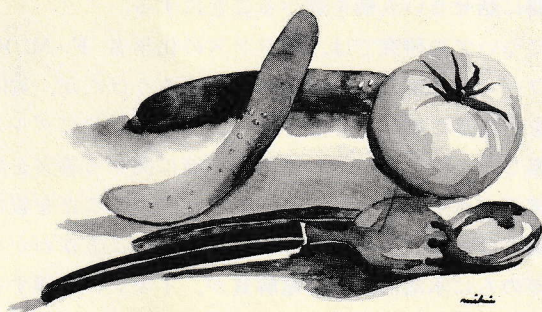
「鳥の社会」 中村登流著 思索社

「社会生態学入門」 伊藤嘉昭著 東大出版会

「モズの嫁入り」 山岸哲著 大日本図書

「モズの話」 唐沢孝一著 北隆館

「女性は進化しなかったか」 サラ・ブラッファァー・フルディ著 思索社



2 J 笠間美紀